

家持となでしこ

—「やまとなでしこ」の源泉の歌—

鈴木武晴

一 『萬葉集』のなでしこ

『萬葉集』には、「なでしこ」が二十八例二十六首の歌にうたわれている。うちわけを巻ごとに歌番号の順に作者を挙げつつ示せば、次のようになる。

卷三 四〇八 (大伴家持)、四六四 (家持)

卷八 一四四八 (家持)、一四九六 (家持)、一五一〇 (家持)、

一五三八 (山上憶良)、一五四九 (紀鹿人)、一六一〇 (丹

生女王、二例)、一六一六 (笠女郎)

卷十 一九七〇、一九七二、一九九二 (以上三首、作者未詳)

卷十七 四〇〇八 (大伴池主)、四〇二〇 (池主)

卷十八 四〇七〇 (家持)、四一一三 (家持、二例)、四二一四 (家

持)

卷十九 四二三一 (久米広縄)、四三三二 (蒲生娘子)

卷二十 四四四二 (大原今城)、四四四三 (家持)、四四四六 (丹比

国人)、四四四七 (橘諸兄)、四四四九 (船王)、四四五〇

(家持)、四四五一 (家持)、

作者別の歌数は、次のとおり。

大伴家持 (11)、大伴池主 (2)、丹生女王 (1)、山上憶良 (1)、

紀鹿人 (1)、笠女郎 (1)、久米広縄 (1)、蒲生娘子 (1)、大原
今城 (1)、丹比国人 (1)、橘諸兄 (1)、船王 (1)、作者未詳
(3)

作者未詳を除く十二名は、大伴旅人に関わる人物と、大伴家持とその
関係者である。してみると、作者未詳も大伴氏の関係者である蓋然性が
高い (本稿者は、卷十の作者未詳歌には大伴氏の関係者の歌が少なから
ず存すると考えている)。作者未詳の実態はともかくとして、「なでしこ」
は、大伴氏の人々とその関係者によって愛された花であると捉えられよ
う。如上の人々のうち、家持が全「なでしこ」歌二十六首の四割強の十
一首の歌を詠んでいる。諸注に説くように、「なでしこ」は家持が特に
愛した花であると認められる。

二 丹生女王歌の大伴家持歌への影響

家持が特に「なでしこ」を愛したのは、家持の感性が「なでしこ」の
花の様相と本質に魅きつけられたからにほかならない。そして、「か弱
そうに見えて、たくましい生命力を持つ」その美しく可憐な花を歌に描
出しているのである (拙著『テーマ別万葉集』へおうふう、二〇〇一年
二月) 第二章42ページ、184—183脚注【考】。けれども、萬葉集中の
「なでしこ」歌を通観すると、家持が「なでしこ」を愛好するきっかけ

となつたと考えられる歌がある。それは、次の歌である。

丹生女王、大宰帥大伴 卿に贈る歌一首

高田の秋野の上のなでしこが花うら若み人の挿頭ししなでしこが
花(8一六一〇)

奈良の都の丹生女王が、筑紫の大宰帥大伴旅人に贈った歌で、「高田の秋野のあちこちに咲くなでしこの花。初々しいので、あなたが挿頭したなでしこの花。」の意。この歌に、伊藤博『萬葉集釋注 四』(集英社、一九九六年八月)は、次のような評を寄せている。

二人は若い頃から親しく、その交わりをずっと続けた模様。この歌も、長年の信頼を上品にやさしく託しており、女王の人柄を窺わしている。「なでしこが花」には若い日旅人に愛された自分の姿を暗示しているらしく、ほのぼのとした追懐の情が美しい。おそらく押花にしたなでしこに添えた歌で、ふるさとを思わせ、古く長い人の心を思わせ、一首を受け取った旅人の心底からの安らぎを偲ぶことができる。

丹生女王の一六一〇歌は、「なでしこ」歌二十六首の中で、天平二年(七三〇)秋の詠作と覚しき「山上臣憶良、秋野の花を詠む歌二首」の第二首、

萩の花尾花葛花なでしこの花をみなへしまた藤袴朝顔の花 その二
(8一五二八)

とともに、年代の古い歌である。が、当面の丹生女王歌と同一の題詞を有する4五五三〜四歌が神龜五年(七二八)の詠作と推定されることから、当丹生女王歌は右掲の憶良歌よりも古いと考えられる。丹生女王歌一六一〇は、萬葉集に最も早く咲いた「なでしこ」歌である蓋然性が高い。とすれば、丹生女王は、最初に「なでしこ」を文芸に昇華させた人と言えよう。その一六一〇歌は、「なでしこ」歌の文芸史を開く重要な歌と定位できよう。

このような和歌文芸史上重要な丹生女王歌一六一〇を贈られた大伴旅

人は、その歌が自分自身に関わる私的なものであるとは言え、譬喩をもつて直接性をさげ雅にうたわれているので、旅人周囲の信頼できる人に語り伝えたものと察せられる。その一人が山上憶良であったと思われる。丹生女王歌一六一〇も、先掲憶良歌一五三八も旋頭歌で、第三句に「なでしこ」の花を据えている。このことは偶然ではなからう。憶良が旅人から丹生女王歌を聞き知り、その影響を受けたことを物語る徴証と思われる。

旅人は子の家持にも語り伝えたものと思われる。先述のように、丹生女王歌一六一〇は、和歌史上注目すべき歌であり、男女間(世の中)の女の思いの機微を知りうる点でも重要な歌である。若き家持に語り伝えるだけの価値ある歌である。以上のことと当丹生女王歌が家持の関心を強く引きつけたことを証するのが、家持の「なでしこ」歌の始発を告げる天平四年頃の詠作と覚しき3四〇八と8一四四八の歌である。

大伴宿禰家持、同じき坂上家の大嬢に贈る歌一首

なでしこがその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日無けむ

(3四〇八、題詞の「同じき」は「大伴」を表わす)

大伴宿禰家持、坂上家の大嬢に贈る歌一首

我がやどに蒔きしなでしこいつしかも花に咲きなむなそへつつ見む(8一四四八)

二首とも、家持が大伴坂上家の大嬢に贈った歌である。題詞の記述は、3四〇八の方が8一四四八よりも丁寧である。詠作も、前者が後者に先行するのであろう。

一四四八歌は、巻八「春相聞」部の最初の歌で、第六首〜第八首には、「天平五年癸酉の春の閏三月に、笠朝臣金村、入唐使に贈る歌」(一四五三〜五)が収録されている。よって、天平四年頃の詠と推定される。すると、3四〇八も同じ天平四年頃の作と見られる。二首とも、坂上大嬢との「離絶」前の歌で、「離絶」を暗示する「大伴坂上家の大嬢、大伴宿禰家持に報へ贈る歌四首」(4五八一〜四)以前の歌かと察せられ

る〔離絶〕のことは、拙稿「坂上大嬢との恋の歌―『離絶数年』をめぐる―」〔セミナー 万葉の歌人と作品 第八巻〕所収、和泉書院、二〇〇二年五月〕を参照されたい。

三四〇八は、「あなたがなでしこのその花であつたらよいのに。そうしたら、毎朝毎朝いつくしまない日はないだろうに。」の意。坂上大嬢を「なでしこ」になぞらえて、愛情を述べた歌である。女性を「なでしこ」になぞらえた歌は、家持歌以前には、丹生女王の八一六一〇歌しかない。この点に加えて、当四〇八歌の表現を仔細に見るに、「なでしこがその花にもが」の上二句は、旋頭歌体の丹生女王歌の、特に下三句「うら若み人の挿頭ししなでしが花」を意識した表現と考えられるのである。四〇八歌第四句「手に取り持ちて」も、丹生女王歌の「挿頭し」という身体に密着させる行為の表現を意識した表現と思われる。

このように、家持最初の「なでしこ」歌と覚しき三四〇八歌には、丹生女王歌が投影している。「なでしこが花」に丹生女王自身を譬え、「人の挿頭しし」に大伴旅人に愛されたことを喩えたその印象歌を家持は脳裏に深く刻みつけていたに相違ない。

丹生女王歌との有機的関連は、八一四四八歌においても見て取れる。一四四八歌は、「我が家の庭に蒔いたなでしこ、このなでしこはいつになつたら花に咲くのであろうか。咲いたならば、その花をあなただと思つて眺めように。」の意。先掲四〇八歌は、家持が丹生女王歌を意識して頭の中で創つた歌と思われ、この一四四八歌には、「我がやどに蒔きしなでしこ」と、家持が自邸の庭に実際になでしこの種を蒔いたことを詠んでいる。なでしこの種を蒔いたのは、「なでしこ」の花を身近に見て実感したかつたからであろう。上二句の表現によつて、下三句に「いつしかに花に咲きなむなそへつつ見む」と表出された坂上大嬢への愛情が、せつないまでに伝わってくるのである。「いつしかに花に咲きなむ」の表現から、当歌を、まだ幼い大嬢の一日も早い成長を願う心から詠まれた歌と捉える見方もある。けれども、題詞に「坂上家の

大嬢に贈る」、歌詠に「我がやどに蒔きしなでしこ」とあることを考慮すると、坂上大嬢に対する純粹な恋心を詠んだ歌と捉えるのが自然だと思われる。

当一四四八歌と丹生女王歌との関連は、女性を「なでしこ」にたとえている点だけではない。双方の歌の表現を見るに、丹生女王歌の「うら若み」は、集中他に五例（四七八八、七一―一二、一〇二〇九五、一一二六二七、一四三五七四）。年代順の最初の例は、卷十一「秋雑歌」部の「花を詠む」歌三十四首の冒頭に古歌として立つ柿本朝臣人麻呂歌集所出二首の第二首二〇九五歌である。考察の都合、二首を掲げれば、次のとおり。さを鹿の心相思ふ秋萩のしぐれの降るに散らくし惜しも（二〇九四）夕されば野辺の秋萩うら若み露にぞ枯るる秋待ちかてに（二〇九五）右の二首は、柿本朝臣人麻呂が歌集に出づ。

丹生女王は、右の略体人麻呂歌集歌二〇九五の語句と用法を踏まえて、一六一〇歌を詠み成したものと考えられる。原文表記から非略体人麻呂歌集歌と知られる第一首二〇九四歌は、秋萩をさを鹿の妻と見立てて詠んだ歌である。同様に、第二首二〇九五歌も「秋萩」に女性をたとえていると見られる。集中において「うら若み」は、次のように女性に対してのみ用いられているからである。

うら若み花咲かたき梅を植ゑて人の言繁み思ひぞ我がする。

（四七八八、家持）

はねかつら今する妹をうら若みいざ率川の音のさやけさ

（七一―一二）

はねかつら今する妹がうら若み笑み怒りみ付けし紐解く

（一一二六二七）

小里なる花橘を引き攀ちて折らむとすれどうら若みこそ

（一四三五七四）

第一例は「梅」に、第四例は「花橘」に、それぞれ女性を譬えている。してみると、二〇九五歌第四句「露にぞ枯るる」には、

しらとほふ小新田山の守る山のうら枯れせなな常葉にもがも

(14三三四二六)

の譬喩歌(「うら枯れず」は他の男の手がつくことのたとえ)をも考慮することによって、心から思ってもいない男に言い寄られ、契りを結んでしまったことが喩えられていると言えよう。さらに、結句の「秋待ちかてに」の「秋」には、夢見ていた意中の男と結ばれる時が表わされていると言えよう。

丹生女王は如上の人麻呂歌集歌二〇九四、五の手法を心得ており、その二〇九五歌の「うら若み」を一六一〇歌に襲用し、その語に続けて「人が挿ししなでしこが花」と個性的に歌い収めたものと考えられる。一六一〇歌を受け取った大伴旅人がその歌を感銘をもつて迎えたであろうことは前述した。そして旅人は、そのことをきっかけとして、次の二首の歌を詠んだのではないかと推察されるのである。

大宰帥大伴卿が歌二首

我が岡にさを鹿来鳴く初萩の花妻とひに来鳴くさを鹿

(8一五四二)

我が岡の秋萩の花風をいたみ散るべくなりぬ見む人もがも

(8一五四二)

丹生女王歌一六一〇が家持歌一四四八にも影響を与えたと考えられることは、家持が丹生女王歌の如上の形成過程を見抜き、丹生女王と同様、略体人麻呂歌集歌を踏まえて「なでしこ」歌一四四八を詠み成していることから立証される。

一四四八歌結句「なそへつつ見む」の「なそふ」は集中に五例(8一四四八、11二四六三、18四〇五四、20四三〇七、20四四五二)。年代の最も古い例は、次掲の略体人麻呂歌集歌である。

ひさかたの天照る月の隠りなば何になそへて妹を偲はむ

(11二四六三)

一首は、「天に照り輝く月が隠れてしまったならば、何になぞらえて、

あの子を偲ぼうか。」の意。愛しい女性を月によそえて偲ぶことを詠む歌で、「月」と「なでしこ」の違いこそあれ、家持の一四四八歌と発想・表現が共通する。家持は、丹生女王歌に学び、それと同様に、略体人麻呂歌集歌の二四六三に学んで、一四四八歌を詠み成したと考えるゆえんである。

三 亡妻となでしこ

前節に論じたように、家持は父旅人に贈られた丹生女王の「なでしこ」歌(8一六一〇)の影響を受けて、坂上大嬢への「なでしこ」の歌(3四〇八、8一四四八)を詠み成したと考えられる。

先に触れたが、天平四年(七三二)頃に詠まれたと推定される坂上大嬢の家持への報贈歌(4五八一、四)の後、家持は坂上大嬢と数年の間離絶することになる(上掲拙稿「坂上大嬢との恋の歌」に考察したように、その期間は天平四年から天平九年までのことと覚しい)。それは、坂上大嬢が天皇に貢上される氏女として宮廷に仕えることになったという大嬢側の主因と、それに連動して生じた家持と大嬢以外の女性との関わりという家持側要因とが絡み合って生じた事態と考えられる(上掲拙稿)。

坂上大嬢との離絶数年の間、家持の心をとらえていた一人の女性があった。家持が後の天平十一年(七三九)六月作の3四六二の題詞に「亡妻」と記す女性である。大伴坂上郎女が坂上大嬢の立場と心とを考慮し、自身の思いをも込めて詠んだ歌と考えられる「怨恨歌」(4六一九、六二〇)は、家持がその女性との愛を深めていたことに対する歌なのである(前掲拙稿)。

深く愛しあうこの女性との関係も、この女性の死によって永遠に閉ざされてしまう。病死と思われる。天平七年頃から疫病がはやり、九年には藤原房前、藤原武智麻呂など政治の中枢に立つ人物もこの世を去って

いる。家持の愛した妾もこの疫病にかかって亡くなったものと察せられる。亡妾のみならず、家持への一途な思いを歌った笠女郎についても同様の事情が考えられ、他の宮廷女性（巻四に登場し家持に恋歌を贈った山口女王、大神女郎、中臣女郎、河内百枝娘子、巫部麻蘇娘子、粟田女娘子、豊前国娘子大宅女、安都扉娘子、丹波大女娘子）などの中にも、疫病によって命を断たれた者がいたと察せられる。前掲拙著『テーマ別万葉集』（第四章一三〇～一三二頁、四五八七～六一〇の題詞についての脚注の【考】）には、「笠女郎の失恋の歌を後にこれほど多くあからさまに掲載したのは、女郎の鎮魂のためか。」と記した。そうでなければ、家持に対する失恋歌の一挙掲載は、はばかられるであろう。

家持は、亡妾の鎮魂のために、一三首の歌（三四六二～四七四。世に「亡妾悲傷歌」と呼ぶ）を捧げた。その中に「なでしこ」を詠む歌が三首ある（四六四、四六六、四六九）。その歌々は、亡妾が家持の「なでしこ」への意識をいっそう深めたことを物語っていると稿者は読む。その歌を掲げよう。

・また、家持、砌の上の瞿麦の花を見て作る歌一首

秋さらば見つつ偲へと妹が植系しやどのなでしこ咲きにけるかも

（三四六四）

・また、家持が作る歌一首併せて短歌

我がやどに花ぞ咲きたる　そを見れど心もゆかず　はしきやし妹
がありせば　水鴨なすふたり並び居　手折りても見せましものを
うつせみの借れる身にあれば　露霜の消ぬるがごとく　あしひきの
の山道をさして　入日なす隠りにしかば　そこ思ふに胸こそ痛き
言ひもえず名づけも知らず　跡もなき世間であれば　為むすべも
なし

（四六六八）

反歌（前二首は省略）

妹が見しやどに花咲き時は経ぬ我が泣く涙いまだ干なくに

（四六九）

四六四歌は、「秋になったら、逢えない時に花を見ながら私のことを思つて下さいね、とあの子が植えた庭のなでしこ、そのなでしこはもう咲き出してしまった。」の意。まだ秋ではないのに、なでしこが亡妾の形見となつて咲いたことを悲嘆し、秋になったらいっそう辛く切なくなるであろうことを言外に漂わせている。第四句までの表現から、亡妾が「なでしこ」の花をこよなく愛しており、春、思いをこめて「なでしこ」の幼い苗を家持の家の庭前に植えたことが知られる。愛する女性の愛する植物によつて、男の心は癒され励まされるものである。亡妾のこの行為によつて、家持の心はいっそう「なでしこ」に魅きつけられたであろう（花に対する愛着も、愛する女性によつて培われる場合が多い）。そして、「なでしこ」は眞実、家持の心に根をおろす植物となつたと察せられる。

「妹が植系し」は事実に基づく表現であろうが、家持の脳裏には、父旅人の亡妻挽歌（三四三八～四四〇、四四五～四五〇、四五二～五三）の最終歌、

我妹子が植系し梅の木見るごとに心むせつつ涙し流る（四五三）

の絶唱が刻まれてあつたと考えられることを補足しておきたい。

この四六四歌の次の四六五歌から秋になつての思いが詠出され、上掲の長歌四六六には四六四歌の語句をうけて、深い悲しみの情が切々と綴られている。その冒頭四句「我がやどに花ぞ咲きたる　そを見れど心もゆかず」「花」は四六四歌の「なでしこ咲きにけるかも」をうける）は、「我が家の庭前になでしこの花が咲いている。その花を見ても心が向かつてゆかない。」の意。この四句は、集中唯一の注目すべき表現で、「悲しみのあまり、愛する花を見ても心が向かつてゆかず、ただぼう然とある家持の姿を浮き彫りにする実存的表現である」（前掲拙著、第二章四四ページ、18四～一三二五脚注の【考】）。

長歌四六六の第三反歌四六九は、四六六の冒頭四句を意識し、その「我がやどに花ぞ咲きたる」に対して、「妹が見しやどに花咲き」と妹へ

の深い思いを込め、もはやこの世に愛する妹の存在しない現実を嘆いて
いる。この歌は、諸注に指摘するように、大伴旅人の妻大伴女郎の長逝
を悼んだ山上憶良の作「日本挽歌」(五七九四〜九)の最後に立つ、
妹が見し棟の花は散りぬべし我が泣く涙はまだ干なくに(七九九)
を踏まえた作と認められる。とともに、大伴旅人の亡妻挽歌の

我妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人ぞなき

(三四四六)

磯の上に根延ふむろの木見し人をいづらと問はば語り告げむか

(四四八)

の歌も家持の念頭にあつたと思われる。

如上の家持亡妻悲傷歌の「なでしこ」歌と関わる歌なのか否か、検討
の余地のある家持の「なでしこ」歌がある。それは、

大伴家持が石竹の花の歌一首

我がやどのなでしこの花盛りなり手折りて一目見せむ子もがも

(八一四九六)

という。卷八「夏雑歌」部の歌で、「我が家の庭のなでしこの花、この
花は今がまつ盛りだ。手折って一目でも見せてやれる子がいればよいの
に。」の意。可憐に咲き盛る「なでしこ」の花に寄せて異性への恋情を
詠んだ歌である。

当歌の結句の「子」については、特定の対象を表わすと捉える説と、
不特定の対象を表わすと見る説がある。いずれの解が家持の真意に即す
るのか。

『全釋』、窪田『評釋』には、「子」は特定の対象を表わし、具体的に
「亡妾」と捉える。『全釋』の発言は次のとおり。

卷三に家持が天平十一年夏六月妾を亡つて、秋去者見乍思跡妹之殖
之屋前之石竹開家流香聞(四六四)とよんだ詠が出てゐる。かれと

これとを比較すると相似たところがあり、時代も略同様らしく思は
れる。これには深い悲傷の感は見えないが、或は妾を亡つた頃の作

か。

この発言を踏まえているのであろう、窪田『評釋』にも、同様の発言を
記し、「ここに云ふ『兒』は、或はその亡妻であるかも知れない。」と結
んでゐる。

これに対し、古典全集本と完訳日本の古典本等には、「子」を不特定
の対象を表わすと見ている。

いったい、「見せむ子もがも」をどのように捉えるべきか。「もがも」
は、物事が存在することを実現することを願う、仮想的願望を表わす助詞
である。しかし、そのことをもって、「子」を不特定の対象を表わすと
見るのは早計に過ぎよう。「もがも」は、不在感に裏打ちされた表現
であり、集中には、大伴旅人が亡妻大伴女郎を追慕して詠んだと推断さ
れる次のような二首の歌が存するからである。

雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もがも(五八五〇)

我がやどのに盛りに咲ける梅の花散るべくなりぬ見む人もがも

(五八五一)

我が岡の秋萩の花風をいたみ散るべくなりぬ見む人もがも

(八一五四二)

注目されることは、八五〇歌に、「見む人もがも」とともに、当面の
家持一四九六歌と共通する「盛りなり」の表現が用いられていること
である。「盛りなり」「なり」は断定の助動詞「なり」の終止形)は、集
中に九首十例、次のとおり。

a あをによし奈良の都は咲く花のほふがごとく今盛りなり

(三二二八)

b 梅の花今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛りなり(五八二〇)

c 梅の花今盛りなり百鳥の声の恋しき春来るらし(五八三四)

d 雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もがも(五八五〇)

e 茅花抜く浅茅が原のつほすみれ今盛りなり吾が恋ふらくは

(八一四四九)

f 我がやどのなでしこの花盛りなり手折りて一目見せむ子もがも

(8 一四九六)

g 我が背子に我が恋ふらくは奥山の馬酔木の花の今盛りなり

(10 一九〇三)

h さ額田の野辺の秋萩時なれば今盛りなり折りてかざさむ

(10 二一〇六)

i 桜花今盛りなり難波の海押し照る宮にきこしめすなへ(20 四三六二)

「今盛りなり」の表現は、aの大宰少弐小野老の歌を嚆矢とする。bの、天平二年(七三〇)の正月十三日に大宰府長官大伴旅人が催した梅花の宴で詠じられた筑後守葛井大夫の歌は、a歌を意識しての作品である。同宴でb歌を意識して詠んだのが、cに掲げた小令史田氏肥人の歌である。dの再掲旅人歌の「今盛りなり」は、以上のように継承されてきた表現の襲用なのである。eは、大伴田村大嬢が異母妹坂上大嬢に贈った歌。表現から、g歌との有機的関連が知られる。hもgと同じく卷十の歌。iは家持歌で、「今盛りなり」を「桜花」に適用した点が独自である。

このように歌詠を並べて見ると、「(今)盛りなり」をうけて、「見む人もがも」または「見せむ子もがも」と詠んだ歌は、旅人歌八五〇と家持歌一四九六の二首しかないことが、いっそう鮮明になる。このことは、二首の歌詠の有機的関連を示し、家持が旅人歌八五〇を意識して一四九六歌を詠み成したことを物語っている。旅人歌八五〇は、先述のように、亡妻大伴女郎の面影を抱きつつ詠んだ歌である。この歌に共感し、意識的にその表現を踏まえて詠んだと考えられる家持の一四九六歌も、やはり特定の対象を念頭に据えて詠まれた歌と見られるのである。そして、その対象として、おのずと亡妻がクローズアップされるのである。

ここで目を引くのは、「全釋」と窪田『評釋』に家持歌一四九六との関連を見る家持亡妻悲傷歌の三四六四歌をうけて、切々と妾不在の悲しみを綴った先掲四六六歌の存在である。この歌の第十句までには、次の

ように当面の一四九六歌と共通する語が目立つ。

我がやどに花ぞ咲きたる そを見れど心もゆかず はしきやし妹が
ありせば 水鴨なすふたり並び居 手折りても見せましものを……

(四六六)

四六四歌と一四九六歌の共通表現は、「やどのなでしこ」であった。今、当一四九六歌と四六四・四六六歌との共通語句を当歌において傍線で示せば、次のようになる。

我がやどのなでしこの花盛りなり手折りて一目見せむ子もがも

結句の「子」の語も、柿本人麻呂「泣血哀慟歌」の「思へりし妹にはあれど 頼めりし子らにはあれど」(2 二一〇)のように、四六四、四六六歌の「妹」と密接にかかわる。

このように、一四九六歌の初句から結句に至るまでの主要語句が四六四・四六六歌の二首に用いられているのである。表記面においても、「吾屋前」「花」「手折而」「令見」が共通している。語句・表記面のみならず、歌詠の結構においても、一四九六歌は四六六歌と深くかかわっている。すなわち、一四九六歌の「手折りて一目見せむ子もがも」の仮想表現は、四六六歌の「はしきやし妹がありせば……手折りても見せましものを」の仮想表現と響き合っているのである。内容の面においても、なでしこの花を心から手折りて見せたいという歌は、集中にこの二首しかない。

以上の考察に基づけば、家持の一四九六歌は亡妻を追慕した歌である蓋然性がきわめて高いといえよう。

この見方にとって、一四九六歌が収録されている巻八「夏雑歌」部の奈良朝歌の前の方に、藤の花を形見として愛する女性を偲ぶ山部赤人歌一四七一と、大伴旅人の亡妻大伴女郎にかかわる式部大輔石上堅魚の歌一四七二とそれに対する大伴旅人の答歌一四七三が収録されていることは重要である。歌詠は、次のとおり。

山部宿禰赤人が歌一首

恋しけば形見にせむと我がやどに植えし藤波今咲きにけり

(二四七二)

式部大輔石上堅魚朝臣が歌一首

ほととぎす来鳴き響もす卯の花の伴にや来しと問はましものを

(二四七二)

右は神龜五年戊辰に、大宰帥大伴卿が妻大伴郎女、病に遇ひて長逝す。その時に、勅使式部大輔石上朝臣堅魚を大宰府に遣はして、喪を弔ひ并せて物を賜ふ。その事すでに畢りて、駅使と府の諸卿大夫等と、ともに記夷の城に登りて望遊する日に、すなはちこの歌を作る。

大宰帥大伴卿が和ふる歌一首

橘の花散る里のほととぎす片恋しつづ鳴く日しぞ多き(二四七三)

赤人歌一四七一は、「恋しい時には、あの人を偲ぶよすがにししようと、我が家の庭に植えた藤、その藤の花が今咲いている。」の意。藤の花は愛する女性を思わせる花で、おそらくその女性が好きだ花なのであろう。互いに愛しつづも、二人は運命の手によって引き離されたのであろう。一首からは、いつまでも変わらないうち続くであろう思慕の念が伝わってくる。改めてこの歌をしみじみと読むと、おのずと家持亡妻悲傷歌の先掲四六四歌が想起される。四六四歌の場合は、愛する女性が「なでしこ」を植えたのであるが、赤人歌一四七一と家持の四六四歌は、歌の結構・語句・発想・内容の面で次のように密接にかかわる。

恋しけば形見にせむと我がやどに植えし藤波今咲きにけり(二四七二)

秋さらば見つつ偲へと妹が植えしやどのなでしこ咲きにけるかも

(四六四)

このことから、家持は赤人歌一四七一に表出されている一人の女性への愛に深く感動し、その歌を亡妻悲傷歌の四六四歌を成す際に強く意識したものと察せられる。

赤人歌一四七一の直後の先掲一四七二～三歌は、その詠作事情が一四

七二歌の左注に記されている。それによって、勅使式部大輔石上堅魚が大伴旅人の妻大伴郎女の弔喪を終えて、大宰府の官人たちと城の山に望遊した時の歌であることが知られる。堅魚歌一四七二は、「ほととぎすが来て鳴き響もしている。お前は卯の花の連れ合いとしてやって来たのかと問うてみたいものだ。」の意。旅人を「ほととぎす」に、亡妻大伴郎女を「卯の花」によそえて、妻を亡くした旅人の心情を思いやっている。これをうけて、旅人は、「橘の花」に亡妻を、「ほととぎす」に旅人自身をよそえ、亡妻追慕の情を詠んで和している。

家持の一四九六歌は、まさにこの三首の歌と響き合うように同一部立の奈良朝歌の後ろから二番目に置かれていて考えられるのである。ちなみに、最後に立つのは、高橋連虫麻呂歌集所出の次の歌である。

筑波山に登らざりしことを惜しむ歌一首

筑波嶺に我が行けりせばほととぎす山彦響め鳴かましやそれ

(二四九七)

右の一首は、高橋連虫麻呂が歌の中に出づ。

この歌は後の追補と覚しい(『釋注』一四九七釈文)。けれども、追補の理由はわかっていない。しかし、この歌は、先掲石上堅魚と大伴旅人の一四七二～三歌の直後に存する次のような大伴坂上郎女の歌と響き合うことを意図して、巻八「夏雑歌」部の最後に置かれたものと考えられるのである。

大伴坂上郎女、筑紫の大城の山を思ふ歌一首

今もかも大城の山にほととぎす鳴き響むらむ我なけれども

(二四七四)

虫麻呂歌集所出一四九七歌は、本来は巻九の一七五四歌と一七五五歌の間に置かれていたものと推定されるが、長歌を伴わない単独短歌であることが要因となつて、結果として巻八「夏雑歌」部の最後に位置することになつたのであろう。そして、坂上郎女の一四七四歌との響き合いによって、換言すれば、日本の南の筑紫の大城山と北の筑波山に鳴くほ

とどぎすを響き合わせることによって、ほとどぎすの鳴く一大風土世界を表わそうとしたのだと考えられるのである（集中に「筑紫」と「筑波」とを響き合わせた例は他に、3三八一と三八二と三がある）。

以上の考察によって、家持の「なでしこ」歌一四九六が赤人の一四七一歌や石上堅魚と大伴旅人の一四七二と三歌と響き合うこと、そして、一四九六歌が亡妾への思いをこめた歌である蓋然性が高いことが明らかになったと思う。亡妾を歌の中心に据える一四九六歌を「雑歌」の部に収録したのも、大伴旅人の亡妻大伴郎女を追慕する一四七二と三歌との響き合いを意図したためと言えよう。

家持は亡妾悲傷歌群（三四六二と四六四）を公にした後、石上堅魚と父旅人の郎女追慕歌一四七二と三をしみじみと読むことがあったのである。思いは父旅人の他の郎女追慕歌にも及び、先掲八五〇や八五一の歌を想起したものとされる。その時に、亡妾への思いが湧き上がってきて、亡妾悲傷歌群を改めて想起したに違いない。けれども、歌をうたわなければその思いを鎮めることができなかつたのであろう。そこで家持は、想起した旅人の八五〇と自作の亡妾悲傷歌群の四六四歌と長歌四六六の表現をもとにして、一四九六歌を読み成したものと考えられる。家持の一四九六歌と堅魚・旅人の一四七二と三歌の響き合いの背景には、このような詠作事情があつたものと推察される。この推察に拠れば、一四九六歌は家持が公の場を経て一人いる時に詠んだ歌と見られる。それは、旅人が梅花の宴という公の場を経て一人、その宴歌に追和する八五〇と一を詠み成した事情に等しい。この点に思いを致すならば、家持の一四九六歌は、対象こそ異なるけれども父旅人の八五〇と一の心に追和する姿勢を持つ歌であるという見方も導かれてくる。

四 笠女郎、紀鹿人・紀女郎となでしこ

家持と坂上大嬢の「離絶」期間に詠まれた、家持にかかわる他の作者

の「なでしこ」歌について見ておきたい。まず、笠女郎歌。

笠女郎、大伴宿禰家持に贈る歌一首

朝ごとに我が見るやどのなでしこの花にも君はありこそぬかも

（八一六一六）

卷八「秋相聞」の部の歌で、家持が大嬢に贈った先掲三四〇八、八四四八よりは後、亡妾悲傷歌の「なでしこ」歌より前の歌である。歌詠は、「朝ごとに私が見る庭のなでしこの花、その花でもあなたはあつて下さらないものか。」の意。家持がなでしこであつたならば、いつも逢うことができるのに、と逢えない嘆きを詠んでいる。思うに、笠女郎は、家持がなでしこの花を愛好していることを知っていたのであろう（そのことを家持から直接聞いていたかも知れない）。それゆえ、「なでしこ」を見るたびに家持の面影を思い浮かべていたのであろう。そうした精神的在り方を突きつめていくと、家持の愛する花「なでしこ」が家持自身であればよいのにといい発想に至るのである。してみると、当歌は、笠女郎の家持への一途な思いが結晶した歌と言える。当歌は、朝のなでしこに寄せての歌で、同じ笠女郎が家持に贈った次掲歌は夕の歌で「夕蔭草」に置く「白露」のように、はかなく美しい結晶である。

我がやどの夕蔭草の白露の消ぬがにもと思ほゆるかも

紀女郎の父紀鹿人が詠んだ「なでしこ」の歌が卷八「秋雑歌」部に収められている。

典録 正紀朝臣鹿人、衛門大尉大伴宿禰稻公が跡見の庄に至りて作る歌一首

射目立てて跡見の岡辺のなでしこの花ふさ手折り我は持ちて行く
奈良人のため（二五四九）

この歌は、紀鹿人が大伴稻公の跡見の庄を訪れた時の歌で、「跡見の岡辺に咲いているなでしこの花。この花をたくさん手折って私は持ち帰ります。奈良で待つ人（妻）のために。」の意。「当地の花を土産にと詠むことによって、主人のもてなしに感謝した挨拶歌」（『釋注』）として

機能している。歌詠から紀鹿人がなでしこの花を好んだことと、人を喜ばせることが好きな人であったことがうかがえる。このような性向は、娘の紀女郎にも継承されていると思われる（478二。拙著『テーマ別万葉集』第九章二三三ページ、478二脚注の【考】参照）。

当歌について、つとに土屋文明『萬葉集年表』には、卷六の歌の配列を考慮して天平五年（七三三）の詠作と知られる「紀朝臣鹿人が跡見の茂岡の松の樹の歌一首」（九九〇）と同時の作と推定している。その歌は、

茂岡に神さび立ちて栄えたる千代松の木の年の知らなく（九九〇）
という。『釋注 四』にも、この「九九〇は、今の歌と同じ宴席の歌であるかもしれない。」と記し、「とすれば、九九〇は初段階、一五四九は最終段階の詠であったと推測される。九九〇は季を示さないので卷六に廻されたのである。」と述べている。妥当な見解と思われる。

九九〇歌には、「茂岡に神さび立ちて栄えたる千代松の木」とあり、一五四九歌には「跡見の岡辺のなでしこの花」と詠まれていることから、作者紀鹿人は大伴稻公の跡見庄の家の宴席から視線を上げて茂岡の松を見て九九〇の歌を詠み、一五四九歌は視線を下げて岡辺のなでしこの花を詠んだものと思われる。松の木に対して、草の花なでしこという対応も意識されているよう。

このような紀鹿人歌一五四九において注目されるのは、題詞に示され、歌によって知られる紀鹿人と大伴稻公（大伴旅人の異母弟。家持の叔父）の交流である。二人の交流は家持と密接にかかわると考えられる。紀鹿人歌一五四九の三首後には、稻公と家持の交流の歌が存する。次のとおり。

衛門大尉大伴宿禰稻公が一首

しぐれの雨間なくし降れば御笠山木末あまねく色つきにけり

（8一五五三）

大伴家持が和ふる歌一首

大君の御笠の山の秋黄葉今日のしぐれに散りか過ぎなむ
（一五五四）

この二首の読みについては、拙稿「大伴家持と大伴稻公」（日本文藝論集第二十六号、一九九三年九月三十日発行）に詳述したので、参照されたい。稻公の官職名「衛門大尉」（衛門府の三等官）は、紀鹿人歌一五四九の題詞に見る稻公の官職名と同じである。

紀鹿人と大伴稻公の交流、そして稻公と家持の交流。この二つのことから浮かび上がってくるのは、家持と紀鹿人の娘紀女郎の関係である。

紀女郎は安貴王の妻であったが（464三〜五題詞の割注）、離縁。その後、家持と親交があったことが知られる（476二〜三、476九、477五〜七八一、8一四六〇〜三、8一五一〇など）。そのことは、むろん紀女郎の父鹿人も承認のことであったらう。そして、家持と紀女郎が親交を結ぶに至る過程において、紀鹿人と大伴稻公の親交が重要な意味を担っていたと思われるのである。

家持は紀女郎に次のような「なでしこ」歌を贈っている。

大伴家持、紀女郎に贈る歌

なでしこは咲きて散りぬと人は言へど我が標めし野の花にあらめ
やも（8一五一〇）

卷八「夏相聞」の部の最後に立つ歌で、「なでしこの花は咲いて散ってしまったと人は言うけれど、万が一にも、私が標を張っておいた野のなでしこの花ではないでしょうね。」の意。「なでしこは咲きて散りぬ」に女性が心変わりして他の男と結婚してしまったことをたとえ、「我が標めし野の花」に意中の女性紀女郎を喩えている。

この歌の「なでしこ」には「撫でし子」の意を響かせていよう。先述のように、紀女郎の父鹿人もなでしこの花を好んだ。家持はそのことも知っていて、紀女郎を「なでしこ」に喩えたものと思われる。とすると、「なでしこ」には、親の愛情をうけて育ち、私も心から愛しく思う、の意がこめられていると思われる。

家持が「なでしこ」歌を詠んだのは、坂上大嬢、亡妾、紀女郎の三人に対してのみ。その三人は家持が心から愛した女性であった。

五 萬葉集末四巻の「なでしこ」

卷十七から卷二十までの末四巻に登場する「なでしこ」歌の最初は、大伴池主の次の歌である。

たちまちに京に入らむとして懷を述ぶる作を見るに、生別は悲しく、断腸万廻にして、怨緒禁めかたし。いささかに所心を奉る一首并せて二絶

あをによし 奈良を来離れ 天離る 鄙にはあれど 我が背子を
見つし居れば 思ひ遣る こともありしを 大君の 命畏み
食す国の 事取り持ちて 若草の 足結ひ手作り 群鳥の 朝立
ち去なば 後れたる 我や悲しき 旅に行く 君かも恋ひむ 思
ふそら 安くあらねば 嘆かくを 留めもかねて 見わたせば
卯の花山の ほととぎす 音のみし泣かゆ 朝霧の 乱るる心
言に出でて 言はばゆゆしみ 礪波山 手向の神に 幣奉り 我
が祈ひ禱まく はしけやし 君が直香を ま幸くも ありた廻り
月立たば 時もかはさず なでしこが 花の盛りに 相見しめと
ぞ (17四〇〇八)

玉梓の道の神たち賄はせむ我が思ふ君をなつかしみせよ (四〇〇九)

うら恋し我が背の君はなでしこが花にもがもな朝な朝な見む (四〇一〇)

右は、大伴宿禰池主が報へ贈りて和ふる歌。五月の二日

右は、天平十九年(七四七)、越中国守の大伴家持が税帳使として一時帰京することになって、掾大伴池主に贈った四月三十日作の「京に入ることやくやくに近づき、非情撥ひかたくして懷を述ぶる一首并せて一

絶」(17四〇〇六、七) に対する池主の報贈歌である。

長歌末尾では、国境いの礪波山の峠の神に「なでしこの花の盛りの時には会わせて下さい」と祈り、第二反歌では、家持の

我が背子は玉にもがもなほととぎす声にあへ貫き手に巻きて行かむ (17四〇〇七)

の五月の薬玉を「なでしこが花」に転じて報えている。池主が「なでしこ」を詠んだのは、「家持がことに好んだ花をうたいこめることで、せつに待つ心を託したからであろう」(『釋注 九』一九九八年五月)と思う。池主が四〇一〇歌を詠み成す際には、かつて家持が坂上大嬢に贈った、

なでしこがその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日無けむ (3四〇八)

の歌を踏まえたと思われることも補足しておきたい。

池主歌四〇〇八と四〇一〇の「なでしこ」の表現から、越中においても、家持の愛する「なでしこ」が見られたことが知られる。そのことは、天平二十一年(七四九)の三月十日頃の詠作と『釋注』に推定する家持歌18四〇七〇によって明確になる。それは、次のような歌である。

庭中の牛麦が花を詠む歌一首

一本のなでしこ植ゑしその心誰に見せむと思ひそめけむ (18四〇七〇)

右は、先の国師の從僧清見、京師に入らむとす。よりにて、飲饌を設けて饗宴す。時に、主人大伴宿禰家持、この歌詞を作り、酒を清見に送る。

先の国師の從僧であった清見という者が帰京することになって、国守の家持が自ら主催した送別の宴で詠んだ挨拶歌である。一首は、「一株のなでしこを庭に植えた私の心、その心は、いつたい誰に見せようと思いついたことであつただらうか。」の意。清見に見せようと思つて植えたなでしこ。清見もなでしこの花が好きであつたのであろう。なでしこ

を植えたのも、そんな清見を喜ばせたいという心からの行為であったのである。その「なでしこ」が咲く前に清見が越中を去ってしまうことを惜しんでいる。

当四〇七〇歌の次に存する二首の歌も、この宴の折の歌で（『釋注九』、四〇七〇歌とかかわるので言及しておきたい。

しなざかる越の君らとかくしこそ柳かづらき榮しく遊ばめ

（四〇七二）

右は、郡司已下、子弟已上の諸人、多くこの会に集ふ。よりにて、守大伴宿禰家持、この歌を作る。

ぬばたまの夜渡る月を幾夜経と数みつつ妹は我待つらむぞ

（四〇七二）

右は、この夕、月光おもぶるに流れ、和風やくやくに扇ぐ。すなはち扇目によりて、いささかにこの歌を作る。

第二首四〇七一は現地讃歌であるのに対し、第三首四〇七二は望郷歌（『釋注九』）。そして、第一首四〇七〇において「なでしこ」を取り上げたことが、第三首四〇七二において都の妻への思いを呼び起こしたものと考えられる。

都の妻への思いを、「なでしこ」や「さ百合花」を通して詠んだのが、天平二十一年閏五月二十六日作の18四一一三〜五である。

庭中の花を見て作る歌一首并せて短歌

大君の 遠の朝廷と 任きたまふ 官のまにま み雪降る 越に
下り来 あらたまの 年の五年 敷栲の 手枕まかず 紐解かず
まる寝をすれば いぶせみと 心なぐさに なでしこを やどに
蒔き生ほし 夏の野の さ百合引き植えて 咲く花を 出で見る
ごとに なでしこが その花妻に さ百合花 ゆりも逢はむと
慰むる 心しなくは 天離る 鄙に一日も あるべくもあれや

（18四一一三）

反歌二首

なでしこが花見るごとに娘子らが笑まひのほひ思ほゆるかも

（四一一四）

さ百合花ゆりも逢はむと下延ふる心しなくは今日も経めやも

（四一一五）

同じき閏の五月の二十六日に、大伴宿禰家持作る。

家持が愛しい妻坂上大嬢に逢えないいぶせさを「なでしこ」や「さ百合花」によって慰さめている旨を詠んだ歌である。長歌四一一三の「なでしこをやどに蒔き生ほし」は、山部赤人の

我がやどに韓藍蒔き生ほし枯れぬれど懲りずてまたも蒔かむとぞ思

ふ（三三四八）

の傍線部の表現の襲用と思われる（拙著『テーマ別万葉集』第二章四二〜三ページ、四一一三脚注の【考】）。また、十代の家持が坂上大嬢に贈った作品にも、

我がやどに蒔きしなでしこいつしかも花に咲きなむなそへつつ見む

（八四四八）

とある（同上拙著四三ページ、脚注の【考】）。一方、「夏野のさ百合」の表現は、家持に思いを寄せる坂上大嬢の立場を考慮しての歌と見られる大伴坂上郎女の

夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ

（八一五〇〇）

を意識しての表現と考えられる（同上拙著四三ページ、脚注の【考】）。一〇六一〜一〇七頁、八一五〇〇脚注の【考】。「さ百合花後も逢はむ」（四一一三、四一一五）は今の「花言葉」的表現である（同上拙著四三ページ脚注の【考】）。「なでしこがその花妻」は、なでしこのその花のように美しく可憐な妻の意で、坂上大嬢をさす。大嬢と結婚する以前に家持は、「なでしこがその花にもが」（三四〇八）と詠んだが、ここでは「なでしこがその花妻」と言いきっている。家持が女性を「なでしこ」と象徴させることは、日本女性を象徴的に讃える「やまとなでしこ」と

という言葉の源泉であると言えよう（同上拙著四三ページ、脚注の【考】²）。

当面の18四一一三〜五は、「由来の古い橘の花と実とをうたった前の四一一〜二に對し、庭中の身近な花、なでしこと百合との二つを詠んだもので、両歌群は取り合わせの作」（『釋注 九』）であると認められる。家持歌において、二つの植物を取り合わせる手法は、遅咲きの藤の花と時期の早い萩の黄葉を取り合わせた次掲8一六二七〜八（坂上大嬢への贈歌）の事例などがある。

坂上大嬢に贈る歌二首
大伴宿禰家持、時じき藤の花、并せて萩の黄葉の二つの物を攀ちて、

我がやどの時じき藤のめづらしく今も見てしか妹が笑まひを

（8一六二七）

我がやどの萩の下葉は秋風もいまだ吹かねばかくぞもみてる

（二六二八）

右の二首は、天平十二年庚辰の夏の六月に往来す。

当面歌は「なでしこの花」と「さ百合花」の花の取り合わせになっていることに留意したい。そして、前歌四一一〜二の「橘」の花との取り合わせについてさらに言えば、「橘」の花（木の花）と「なでしこの花」・「さ百合花」（草の花）の取り合わせとなつていと捉えることができよう（同上拙著四三ページ脚注の【考】）。花橘（木の花）となでしこ（草の花）の取り合わせは他に、家持の8一五〇七〜九（花橘）と8一五一〇（なでしこ）や、巻十の「花を詠む」歌群の一九六八〜七〇（前二首が橘の花、後の一首が「なでしこ」）、一九七一〜二（前者が「花橘」、後者が「なでしこの花」）などに見られる。このこと、拙稿「大伴家持の越中秀吟Ⅱ」（都留文科大研究紀要50集、一九九九年三月三十一日発行）に詳述したので参照されたい。

前歌18四一一〜二と当歌四一一三〜五の花の取り合わせについて、『釋注 九』には次のような注目すべき発言を記している。

前の歌群の橘に橘家（橘諸兄）が張りついていたように、この庭中

の花には花妻（坂上大嬢）が密着している。

両者の取り合わせは、外向けの四〇九四〜七・四〇九八〜一〇〇の歌に對して、内向けの四一〇一〜五の歌を詠んだ状況によく似る。橘諸兄への思いから妻大嬢への思いへと連動したもので、一連は、諸兄をも大嬢をも、ひいていえば、都の親しい人びと総体を読者として想定しているといつてよいだろう。

橘は、葛城王（後の橘諸兄）が天平八年（七三六）十一月に臣籍に降り、橘氏を賜った時に、聖武天皇が、

橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹

（6一〇〇九）

と詠んで以来、橘氏と橘諸兄を象徴する植物となる（18四〇五八〜六〇、18四一一〜二など。上掲拙著第二章四七ページ、6一〇〇九脚注の【考】）。とすると、当面の18四一一〜二と四一一三〜五の植物の取り合わせについては、四一一〜二歌の「橘」が橘氏の花という認識を語り告げるのと同様に、四一一三〜五の大伴氏の家刀自坂上大嬢を象徴する「なでしこ」は大伴氏の花であるという家持の私的認識を物語っていると思われる。

次に巻十九の四二三一〜二の「なでしこ」の歌に考察を進める。この二首は、天平勝宝三年（七五二）の正月三日に、越中介内藏忌寸繩麻呂の館で催された宴での歌四二三〇〜三七の一群中の歌である。考察対象の二首を含む第三首までを掲げれば、次のとおり。

降る雪を腰になづみて参り来し験もあるか年の初めに（19四二三〇）

右の一首は、三日に介内藏忌寸繩麻呂が館に会集して宴樂する時に、大伴宿禰家持作る。

時に、雪を積みて重巖の起てるを彫り成し、奇巧みに草樹の花を採り発す。これに属きて、掾久米朝臣広繩が作る歌一首

なでしこは秋咲くものを君が家の雪の巖に咲けりけるかも

（四二三一）

遊行女婦蒲生娘子が歌一首

雪の山齋巖に植ゑたるなでしこは千代に咲かぬか君がかざしに

(四三三)

第一首四三三〇は、主賓家持の挨拶歌である。第二首四三三一の題詞には、主人繩麻呂が雪を積んで岩が重なり起つようにしたものを彫って草樹の花（歌詠から「なでしこ」と知られる）を成し、それに彩色して美しく浮き立たせたとある（雪の白となでしこの紅の配色は、賀する心を表わしてしよう）。集中に唯一の雪の彫刻の例で注目されるとともに、「なでしこ」は「草樹の花」であるとの認識が明記されている点において重要な題詞である（拙著『テーマ別万葉集』第十五章「万葉の祈り―万葉の正月」四〇〇頁、四三三〇、四三三一歌脚注の【考】）。

「なでしこ」は家持の愛する花で、「主人内蔵忌寸繩麻呂はそのあたりのことを意識して趣向をこらしたのであろう」（『釋注 十』一九九八年十二月）と思う。四三三一歌は、「なでしこは秋咲くものなのに、あなたの家の雪の岩には、咲きつづけていたのですね。」の意。久米広繩のこの感動は、そのまま主賓家持の心であっただろう。「風情と遊び心のあるもてなし」で「主客の心の交流が創造した芸術」と言えるこの「雪の彫刻は、今もまたこれからも、永遠に融けることはない」（同上拙著四〇〇頁、四三三〇歌脚注の【考】）。

「なでしこ」歌の第三首四三三二は、遊行女婦（宴席などで興の華を添える教養ある女性）蒲生娘子の歌で、「雪の降り積もった美しい庭園、その庭園の岩に植えてあるなでしこは、千代に咲いてくれないものでしようか。あなた様の挿頭にするために。」の意。主人繩麻呂が凝らした趣向を通して、主人を賀する心を述べたもの。

「雪の山齋」は、萬葉集中にこの一例のみの表現で（上掲拙著四〇〇頁、四三三二歌脚注の【考】）、雪の降り積もった趣き深い庭園の映像を想起させる。「巖に植ゑたるなでしこ」も集中にこの一例のみ。「雪の巖」に彫刻した「なでしこ」を、巖に植ゑつけてある「なでしこ」と見たの

である。それゆえ、その表現をうけて第四句「千代に咲かぬか」が導き出されてくる。これは、「冒頭家持の『年の初めに』というめでたい表現を意識している」（『釋注 九』）とともに、久米広繩歌四三三一の「雪の巖に咲けりけるかも」をうけて「巖に植ゑたるなでしこ」と詠んだその「巖」の永遠性と密接にかかわっていると思われる。

第五句「君がかざしに」も、「なでしこ」を君がかざしにするという発想に基づく集中独自の賀の表現用法である。

「千代」（千年）と「かざし」とが一首中に用いられている歌は、これ以前には次掲の18四一三六のみ。

天平勝宝二年の正月の二日に、国庁にして饗を諸の郡司等に給ふ宴の歌一首

あしひきの山の木末のほよ取りてかざしつらくは千年寿くとぞ

(18四一三六)

右の一首は、守大伴宿禰家持作る。

前年天平勝宝二年（七五〇）の正月二日に、越中国庁で催された賀宴で、国守大伴家持が詠んだ歌である。四三三二歌の作者である遊行女婦蒲生娘子は、この賀宴にも侍っていて、右四一三六歌を記憶していたのであろう。そして、その歌に学んで、当四三三二歌を詠み成したものと推測される。天平勝宝二年正月二日の宴歌は、家持歌四一三六しか収録されておらず、題詞から「諸の郡司等」が出席したことが知られるのみ。けれども、四三三二歌の読解から、この賀宴に遊行女婦蒲生娘子が侍っていたことが判明するのである。このことは、単独宴歌であっても、その宴の作者以外の出席者が後の歌詠から明らかになる場合があることを告げる事例と言える。

「なでしこ」歌は、萬葉集の最終巻二十において、四四四二、四四四三、四四四四、四四四八、四四四九、四四五一の連続する三つの歌群に豊かに開花している（拙著『テーマ別万葉集』第二章五〇、五四頁には、この三つの歌群を「なでしここと宴」のタイトルのもとに収録し、その存在意

義を示している)。

第一群四四四二〜五は、天平勝宝七歳(七五五)五月九日の次のような宴歌である。

五月の九日に、兵部少輔大伴宿禰家持が宅にして集飲する歌四首
我が背子がやどのなでしこ日並べて雨は降れども色も変らず

(四四四二)

右の一首は大原真人今城。

ひさかたの雨は降りしくなでしこがいや初花に恋しき我が背

(四四四三)

右の一首は大伴宿禰家持。

我が背子がやどなる萩の花咲かむ秋の夕は我を偲はせ(四四四四)

右の一首は大原真人今城。

すなはち鶯の啼くを聞きて作る歌一首

うぐひすの声は過ぎぬと思へども染みにし心なほ恋ひにけり

(四四四五)

右の一首は大伴宿禰家持。

この宴は、直前の四四四〇〜一歌が「上総の国の朝集使大掾大原真人今城、京に向かふ時に、郡司が妻女等の饒する歌二首」であることから、奈良の家持宅における、上総に帰任する大原今城の送別会であることが明らかである。

第一首四四四二は大原今城の歌で、「あなたのお庭のなでしこ、そのなでしこの花は、幾日も雨が降っておりませんが、色も変わりませぬね。」の意。梅雨は降り続くけれども、家持の家の庭には「なでしこ」が色美しく咲いている。その「なでしこ」の花を讃えることを通して、主人の家持を讃美した歌である。「色も変はらず」には、今後も家持への思慕がうちつづくであろうを願う心を込めるとともに、今後も家持への思慕がうちつづくであろうことを暗示していよう。

この歌をうけて家持の詠んだ四四四三歌は、「ひさかたの雨は降り続

いております。が、なでしこは初めて咲いた花のようにいよいよ初々しく、その花のように心引きつけられるあなたです。」の意。主賓の今城を讃えた歌である。「恋しき我が背」には、今だけでなく、「別れたあとでも心引かれて忘れないことをこめて」(『釋注 十』)いよう。続く第三首四四四四は今城の歌で、「あなたのお庭の萩が花咲く秋の夕は、私のことを偲んで下さい。」の意。「前歌の、ともに見ることできた夏のなでしこに対して、これから咲く秋の萩を持ち出して別れを惜しんだ歌」(『釋注 九』)である。「我が背子がやどなる萩」は、今城自身の第一首四四四二の「我が背子がやどのなでしこ」に対する。また、「花咲かむ秋の夕」は、同じく四四四二歌の「日並べて雨は降れども」に対し、ほのかな光を浴びて萩の花の咲くであろう秋の夕に思いを馳せた表現と読める。結句の「我を偲はせ」は、第二首家持歌四四四三の「恋しき我が背」に対すること、明白。

折しも鶯が鳴いた。それを聞いて家持が作ったのが、四四四五の歌である。それは、「夏のめずらしいうぐひすの鳴き声は過ぎてしまったと思うけれども、その美しい声が染み込んでしまった私の心、この心はかわらぬにその声を恋慕うことです。」の意。家持は時期はずれのもの、あはれを敏感に感じとった人であり、当歌以外にも、8一六二七〜八、19四二一九などの事例がある(拙著『テーマ別万葉集』第二章五一頁、四四四五歌脚注の【考】)。上記事例が植物の事例であるのに対し、当歌の場合は動物(鳥)である点が注目される。また、前三首が「なでしこ」と「萩」の植物の花鳥意識であるのに対し、当第四首が鶯の歌である点については、家持の花鳥意識(この場合は、花鳥の例外的取り合わせに興ずる意識)が働いているであろう。「うぐひすの声は過ぎぬ」は、

妹があたり繁き雁が音夕霧に來鳴きて過ぎぬすべなきまでに

(9一七〇二)

という人麻呂歌集歌の傍線部の表現と同様の表現と考えられ、「過ぎぬ」については右掲歌の他に、

ほととぎす鳴きて過ぎにし岡をかびから秋風あきかぜ吹きぬよしもあらなくに

(17三九四六)

という歌に同用法を見出すことができる。よって、「うぐひすの声は過ぎぬ」は、題詞の「すなわち鶯の啼なくを聞きて」に対応する表現で、折しも鶯が鳴き過ぎたことを表わすと捉えるべきだと思ふ。それをうける第二句から第三句にかけての「〜と思へども」の逆接表現が効果的で、下二句の表現を印象的に押し出している。

第四句の「染みにし心」は、柿本人麻呂歌集の

肥人こまひとの額髪ぬかみゆ結ゆへる染木綿しめゆふの染みにし心我われ忘れめや (11二四九六)

の第四句を襲用し、かつそれを聴覚に応用したものと考えられる(上掲拙著第二章五二―五三頁、20四四四五脚注の【考】)。結句の「なほ恋ひにけり」には、第二首の「四四四三の結句『恋しき我が背』と同様、別れたあとの恋しさに思いを及ぼして」(『釋注 十』) いるであろう。

家持と今城の深い心友関係を語り告げる、以上の歌群の次には、左記のようなでしこ歌主体の第二群が存する。

同じき月の十一日に、左大臣たちばなのまつきみ橘たちばな卿うだい、右大弁丹比国人真人うだいべんたちひのくにひとのまひとが宅いへにして宴うたげする歌三首

我がやどに咲けるなでしこまひ賄まひはせむゆめ花散るないやをちに咲け

(19四四四六)

右の一首は、丹比国人真人、左大臣を寿く歌。

賄まひしつづつ君きみが生おほせるなでしこが花はなのみ問とはむ君きみならなくに

(四四四七)

右の一首は、左大臣が和ふる歌。

あぢさゐの八重やへ咲さくごとく八つ代やよにをいませ我が背せ子見こつつし悞しはむ (四四四八)

右の一首は、左大臣、味狭藍あぢさゐの花に寄せて詠む。

前歌群の詠出された二日後の歌群で、左大臣橘諸兄が右大弁の職にあった丹比国人の家に招かれての宴歌である。第一首四四四六は丹比国人

歌で、「我が家の庭に咲いているなでしこよ、贈り物はしよう。けつして花は散るなよ。いよいよ若返って咲くのだぞ。」の意。「賄」は便宜を乞うて贈る物。上掲拙著(第二章五二頁、四四四六歌脚注の【考】)に指摘したように、集中六例(5九〇五、6九八五、9一七五五、17四〇〇九、20四四四六―七)で、20四四四七以外は「賄はせむ」の表現をとり、当歌と次歌四四四七のみが「なでしこ」を対象としてのユーモラスな用法となっている。「いやをちに咲け」は、なでしこがいよいよ若かえるように次々と可憐な花を咲かせる、その実態に即しての表現と思われ。

この歌に、左大臣橘諸兄は四四四七歌を詠んで和した。その歌は、「贈り物をしてはあなたが育てているなでしこの、その花だけに問いかけるような実のないお方ではないはずです。」の意。丹比国人が花に關心を寄せるだけでなく実もある人であることを承知している旨をユーモアをもって歌っている。国人歌のユーモアにユーモアをもって応じた歌と読める。諸兄が相手を思いやるユーモアのセンスを持った人物であったことは、17三九二二―六の左注の記述が物語っている(上掲拙著第十五章、三九八頁、17三九二二―六左注の脚注の【考】)。ここはそれに加える事例。

丹比国人の家の庭には折しもあじさいの花も咲いていたのであろう。梅雨時の美しいあじさいの花を見逃さずキャッチして詠んだのが、諸兄の四四四八歌である。それによって、前二首の「なでしこ」に「あじさい」を取り合わせるという集中唯一の新しい花の取り合わせが生まれることになったのである。

その歌は、「あじさいが次々と花の色を変えながら常に新しく咲きつづけるように、いつまでもお元気でいらして下さい、あなた。毎年このようにあなたを見つづ讚えましょう。」の意と考えられる。「あじさいの八重咲くごとく八つ代にを…」は、集中に当歌のみの生新たな表現で、諸兄の歌作の力量をうかがわせる(上掲拙著五三頁、四四四八歌脚注の

【考】。諸兄は、毎年、あじさいの生命を愛情深く見つめつづけてきたのであろう。そして、あじさいに励まされてもきたのであろう。そうした体験なしには、相手を思いやるこのような生新な表現は生まれなideあろう。結句の「見つつ偲はむ」については、「あじさいを見つつあなたを偲はむ」(「偲ふ」は思い出して慕う意)と解されている。けれども、文脈を考慮すると、この「偲はむ」の「偲ふ」は、

美夜自呂のすかへに立てるかほが花な咲き出でそねこめて偲はむ

(14三五七五)

の「偲はむ」の「偲ふ」と同様、眼前にして讚える(愛でる)意と解するべきである。すなわち、「見つつ偲はむ」は「あなたを見つつ(あなたを)偲はむ」で、先述のように「(毎年このように)あなたを見つつ讚えましよう」の意となる。この解は、以下に記すこの宴の目的の考察と密接にかかわる。

当宴について、『釋注 十』には「諸兄が二首もうたい、その二首が結局主人国人をほめ国人の健勝を念じている点によれば、国人の賀事を記念する宴であったか。」と推測している。この推測に、本稿は具体的考察と見解をもつて応じる。

集中に、当四四四八歌と同様の詠法をもつ歌がある。次の歌である。

市原王、宴にして父安貴王を禱く歌一首

春草は後はうつろふ巖なす常磐にいませ貴き我が君(6九八八)

当四四四八歌はこの歌の下三句と同様の、比喩十本旨十呼びかけの形をとる。

巖なす常磐にいませ貴き我が君(九八八)

あぢさゐの八重咲くごとく八つ代にいませ我が背子(四四四八)

市原王の九八八歌は、安貴王の四十歳の賀を祝う宴の歌と推定されている(大森亮尚「志貴皇子子孫の年譜考」萬葉第百二十一号)。してみると、当宴も丹比国人の歳の賀を祝う宴であった蓋然性が高いと思われる。

このような宴席歌群の次には、その七日後の天平勝宝七歳(七五五)五月十八日の宴席歌とそれへの追作歌が収録されている。いずれも「なでしこ」を詠む左記の三首である。

十八日に、左大臣、兵部卿橘 奈良麻呂朝臣が宅にして宴する歌三首

なでしこが花取り持ちてうつらうつら見まくの欲しき君にもある

かも(20四四四九)

右の一首は治部卿船王。

我が背子がやどのなでしこ散らめやもいや初花に咲きは増すとも

(四四五〇)

うるはしみ我が思ふ君はなでしこが花になそへて見れど飽かぬかも

(四四五一)

右の二首は、兵部少輔大伴宿禰家持追ひて作る。

左大臣橘諸兄が子の兵部卿橘奈良麻呂の宅での宴に出席した時の歌である。

第一首四四四九は治部卿船王の歌で、「なでしこの花を手に取り持つてまぎまぎと見るように、いつも眼前に見たいあなたでございます。」の意。「うつらうつら」は「うつ」(現実の意)「ら」(接尾語)で、眼前にはつきりと、の意。集中にこの一例のみの個性的表現。

続く家持の二首は、左注に記されてあるように、追作歌(宴に参加せずに後から追って作った歌)である。四四五〇歌は、「あなたのお庭のなでしこは、散つたりするでしょうか。今咲いたばかりの花のようによいよ初々しく咲き増えることはあっても。」の意。「いや初花に」は、先掲家持歌四四四三に用いられていた。ここはその再用。このことは、家持が四四四二、四、四四四五、八、四四四九、五一の三つの歌群を「なでしこ」にかかわる有機的歌群と捉えていたことを物語っていると見えよう。

また、当四四五〇の歌は、葛城王(後の橘諸兄)・佐為王(葛城王の

弟)等が臣籍に降下して「橘宿禰」の姓を賜った時に、橘宿禰奈良麻呂が詔に應じて詠んだ、

奥山の真木の葉しのぎ降る雪の降りはずも地に落ちめやも

(61010)

の歌と語法を意識し、「降る雪の降りはずも」に対して「いや初花に咲きは増すとも」、そして「地に落ちめやも」を受けて「散らめやも」と詠んだものと考えられる。当四四五〇歌は、橘諸兄や奈良麻呂の橘氏にとつての記念歌61010を想起させる歌ともなっているのである。その点に、当歌の賀性がある。

次の四四五一歌は、「気高く立派なお方だと私が思うあなた様は、咲き盛るなでしこの花のようで、いくら見ても見飽きることがございませぬ。」の意。「なそへて」は、家持「なでしこ」歌81四四八の「なそへつつ見む」の考察において述べたのと同じように、略体柿本人麻呂歌集歌11二四六三の表現に学んだ表現と考えられる。ここはその人麻呂歌集歌と全く同じ「なそへて」の表現形で、配置箇所も同じである。また、一首の歌い収めの「見れど飽かぬかも」は、人麻呂嘴矢の讚美表現(1三六)。家持はその表現を末四巻においてはこれ以前に一例、天平十八年(七四六)の正月の応詔歌に次のように用いている。

大宮の内にも外にも光るまで降れる白雪見れど飽かぬかも

(1739226)

家持は、自身にとって記念すべきこの三九二六歌の「見れど飽かぬかも」を当四四五一歌に再用して、奈良麻呂へのこよなき讚美の情を述べていると言えよう。「我が背子」(四四五〇)と「君」(四四五一)は、直接には橘奈良麻呂をさす。けれども、上述の二首の形成過程に拠れば、二首には橘諸兄を賀する心も重ねられていると思われる。

「見れど飽かぬかも」の表現は、四四五一歌の後には、直後に置かれている「八月の十三日に、内の南の安殿に在して、肆宴したまふ歌二首」(20四四五二―三)の第二首家持歌(未奏歌)に、

秋風の吹き抜き敷ける花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも

(四四五二)

と用いられている。家持は奈良麻呂宅での追作宴歌四四五一の「見れど飽かぬかも」を肆宴未奏歌四四五二に應用したのであろう。その際に、先掲17三九二六をも想起したのであろう。

家持の「なでしこ」歌、萬葉集の「なでしこ」歌は、家持の四四五一歌をもつて幕を閉じる。「なそへて」の考察のところでも触れたように、「なそふ」という言葉によつて、奇しくも家持初期のなでしこ歌81四四八と最後のなでしこ歌四四五一が響き合う形になっている。前者は坂上大嬢を愛する歌、後者は橘奈良麻呂を讚美し、橘諸兄を讚める心をもめた歌である。時の流れを感じさせる。けれども、なでしこに寄せてかけがえのない人を讚美するその心は変わらない。

六 萬葉集と大伴家持の「なでしこ」歌の意義

萬葉集と大伴家持の「なでしこ」歌の意義は、叙上の萬葉集の内部徴証に加えて、後の和歌集に「なでしこ」がどのように歌われているかを考察することによつて、いっそう明るく照らし出されるであろう。

『古今集』には「なでしこ」は二首二例。新たに「常夏」という言い方が一例見られる。「なでしこ」歌は次のとおり(本文は新潮日本古典集成『古今和歌集』昭和53・7による)。

我のみやあはれと思はむきりぎりす鳴く夕かげのやまとなでしこ

(巻四、秋歌上、一四四、素性法師)

あな恋しいまも見てしが山賤の垣ほに咲ける大和撫子

(巻十四、恋歌四、六九五、よみ人しらず)

二首は、萬葉集の、

蔭草の生ひたるやどの夕影に鳴くこほろぎは聞けど飽かぬかも

(10二二五九)

我がやどの秋の萩咲く夕影に今も見してか妹が姿を（8一六二二）などの歌の系譜に立つと判断される。けれども「やまとなでしこ（大和撫子）」の印象的言葉が用いられていることが目を引く。後者よみ人しらず歌六九五は、前者素性法師の二四四歌に先行する歌と認められるが、それは愛しい女性を「やまとなでしこ」によそえた歌である。この歌は、日本女性を「やまとなでしこ」の言葉をもって讃えた最初の事例と覚しく、重要である。が、「やまとなでしこ」の言葉こそ用いられていないけれども、先述のように萬葉集の家持の「なでしこ」歌は女性を美しく可憐ななでしこによそえて讃えた歌であり、古今集のよみ人しらず歌の「やまとなでしこ」の用法の源泉をなしていることを強調しておきたい。

『古今集』において「なでしこ」の別名「とこなつ」を詠みこむ歌は次のとおり。

隣より、常夏の花を乞ひにおこせたりければ、惜しみてこの歌をよみてつかはしける

よみてつかはしける 躬恒

塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝るとこなつの花

（卷三、夏歌、一六七）

この歌は、「咲き初めてより塵一つさえ付けまいと大切に思っています。夜ごと妻と私が共寝する床という名を持つ常夏の花は。」の意。「とこなつ」の「とこ」に共寝の「床」を連想したことが知られる。

『古今集』の次の『後撰集』の卷四・夏のよみ人しらずの歌には、次のように萬葉集歌の影響が色濃い（本文は、『新編国歌大観』第一卷八角川書店、昭和58・2Vによる。以下の和歌集も同じ）。

女ごもて侍りける人に、思ふ心侍りてつかはしける

a ふた葉よりわがしめゆひしなでしこの花のさかりを人にをらすな

（一八三）

題しらず

b ひとしれずわがしめしものとなつは花さきぬべき時ぞきにける

（一九八）

c わがやどのかきねにうゑしなでしこは花にさかなんよそへつつ見む

（一九九）

d なでしこの花ちりがたになりけりわがまつ秋ぞちかくなるらし

（二〇四）

a とb 歌には、先掲大伴家持のなでしこの歌8一五一〇の影が看取れる。また、c 歌には、先掲家持歌8一四四八が投影していること、明らか。さらにd 歌は、萬葉集卷十の

野辺見ればなでしこの花咲きにけり我が待つ秋は近づくらしも

（一九七二）

に学んだ形跡が濃い。

『拾遺集』では、紀貫之の次の歌が注目される。

延長七年十月十四日、もとよしのみこの四十賀し侍りける時の屏

風に

とこ夏の花をし見ればうちはへてすぐる月日のかずもしられず

（卷十六、雑春、一〇七九）

この歌は、題詞に記されているように、もとよしのみこの四十の賀の時の屏風歌である。「なでしこ」に賀の心を託した歌は、すでに先掲萬葉集歌四四四二、四四四六、四四四八、四四四九、四四五一に見られた。貫之の歌は萬葉集歌の系譜の上に立つと位置づけられる。貫之は上記萬葉集「なでしこ」歌のうち、咲き盛るなでしこに寄せて「うるはしみ我が思ふ君はなでしこが花になそへて見れど飽かぬかも」と詠んだ家持歌四四五一や将来に及ぶ「いやをちに咲け」（四四四六）、「いや初花に咲きは増すとも」（四四五〇）の表現を心得ていたであろう。それゆえ、今までに過ぎ去った月日に焦点を置き、「うちはへてすぐる月日のかずもしられず」と独自の表現を成して賀する心を述べたものと思われる。

『拾遺集』の後では、次のような歌が、なでしこ（とこなつ）と露とのかかわりを詠んで新しい境地を開拓している。

なでしこの花をみてよめる

藤原経衡

うすくこくかきほににほふなでしこのはなのいろにぞつゆもおきける。(詞花集、卷二、夏、六九)

瞿麦露滋といふ事を

高倉院御歌

白露のたまもてゆへるませの中にひかりさへそふとこ夏の花(新古今集、卷三、夏歌、二七五)

この後も「なでしこ」歌について調べてゆけば、いろいろな発見があるであろう。その調査報告は別の機会に譲りたい。

ここまで見てきて言えることは、萬葉集の「なでしこ」歌、就中、大伴家持の「なでしこ」歌の存在意義が大きいということである。女性を「やまとなでしこ」という言葉をもつたとえた例は、『古今集』に見られるけれども、やまとの女性を「なでしこ」によそえる手法は、『萬葉集』の丹生女王の81610歌によって開かれ、家持歌によって確立されたと言える。その「なでしこ」にたとえ讃えられる日本女性の美的本質は、以後脈々と受け継がれ、現在に至っている。今後もその本質は生き続けてゆくであろう。

和歌史、日本文学史という面においてのみならず、日本文化史、日本精神史、そして日本女性史などの面から見ても、大伴家持歌の存在意義はきわめて大きいと思われる。

二〇〇二年八月平成十四年七月七日

注

(1) 詳細は別稿に記す。

(2) 本稿は、この私見を萬葉集の内部と萬葉集より後の和歌集の検討を通して鮮明化することを意図したものである。

(付記)

山梨県は萬葉的光景の見られる県である。植物では、桃の花と李の花。また、なでしこの花。稿者の住む甲府市は、なでしこの花を市の花とす

る。市内を流れる荒川の河川敷の花畑には、かわらなでしこ、からなでしこ、その中間種のなでしこが植えられてあり、時期が来ると美しく可憐な花を咲かせる。稿者はちょうど花盛りのなでしこを日々見つめてはこの稿の執筆を続けた。甲府市の「なでしこ」の魅力が、「なでしこ」の原点を語り告げる萬葉集の「なでしこ」への愛着をいっそう深めてくれたのである。甲府市の「なでしこ」に感謝しつつ擲筆。